

「京都基本構想（仮称）」（案）

序 文

第一章 京都基本構想策定の背景

- 第一節 世界文化自由都市宣言―世界史を担うまちを目指して
- 第二節 京都市基本構想―21 世紀の到来を見据えて
- 第三節 京都基本構想の策定―「都市の理想」に立ち返って

第二章 京都のかたち

- 第一節 悠久の自然との共存の中で
- 第二節 歴史の重なり、文化の奥ゆき、ひとの連なり
- 第三節 節度と矜持^{きょうじ}に基づくひらかれたまち柄
- 第四節 世界から敬愛^{がくげい}される学藝の府

第三章 世界・日本・京都市のいまと未来への課題

- (1) 人口動態の変化とその影響
- (2) 日本経済の動向と京都市の産業
- (3) 環境問題・自然災害の深刻化と自然との関わりの希薄化
- (4) その他の国際的課題

第四章 わたしたち京都市民がめざすまち

- 第一節 歴史と文化を介して人間性を恢復^{かいふく}できるまち
 - (1) 本物（ほんまもん）を追究・創造し続ける
 - (2) 世界の文化と交流し、新たな文化を創造し続ける
 - (3) 「夢中」と「感動」に溢れ^{あふ}、学び続けられる
 - (4) 平穏^{へいおん}と静寂^{せいじやく}のもとで自己と世界と深く向き合える

第二節 自然への畏敬と感謝の念を抱けるまち

- (1) 謙虚に自然と関わり続ける
- (2) 災害や感染症などの危機からしなやかに立ち直る

第三節 自他の生をともに肯定し尊重し合えるまち

- (1) 多層的でゆるやかなつながりが続く
- (2) 支え合いの中で日々の生活を営める
- (3) ひとりひとりの個性や価値観を尊重し合える

第五章 わたしたち京都市民のこれから

未来への問いかけ

序文

わたしたち京都市民は、京都市が、
わたしたちと世界中のあらゆる人々にとって、
歴史と文化を介して人間性を恢復^{かいふく}できるまち、
自然への畏敬と感謝の念を抱けるまち、そして、
自他の生をともに肯定し尊重し合えるまちであり続けるために、
不断の努力を重ねていく。

人間は、過去に生かされ、未来を生きている。

京都市は、平安京成立から 1200 年以上の歳月を経て、人類の文明においても稀有^{けう}な歴史都市・文化都市として世界中の人々から敬愛されるに至った。わたしたち京都市民は、今日に至るまでに有名・無名を問わない無数の先人たちの献身があったことを忘れてはならない。このまちを重層的に彩る各時代の史跡も、人間の極致を体現してきた工^{こう}藝^{げい}や藝^{げい}道^{どう}も、歴史の偉大な産物であるのみならず、市井^{しせい}の人々の愛着と創意とに支えられて残存してきた。

わたしたち京都市民は、幸運にも近年の戦禍を免れてきたこれらの人間的遺産の享受者であると同時に、これらの継承者でもある。この系譜に在ることの意義と幸福^かを噛み締めながら、節度^{せうど}と矜持^{きやうじ}のもと、先人たちの営為の結晶を未来に伝え遺していく責任を果たしていきたい。

人間は、自然に生かされ、自然を生きている。

京都市は、信仰から美意識に至るまでのさまざまな思想を、豊かな自然との関係の中で醸^{じやう}成^{せい}してきた。悠久を体現する山々に囲まれ、清らかな水の恵みに満ち溢^{あふ}れたこのまちは、自然と人間の根源的な不可分性や一体性を思想的土壌とし、食文化や農林業はもちろん、服飾、建造物、そして町並みまでもがこの水脈と土壌とに根差している。

わたしたち京都市民は、自然を人間から切り離し客体化してきた過去数世紀を省み、新たな可能性として、このまちが育んできた自然観一ゆえに、これと不可分な人間観一を世界に提示していくとともに、他の文化圏・思想圏との響^{きやう}創^{そう}のもと、人間と、人間の営為たる科学や経済、そして自然とが、真に共存する未来に貢献していきたい。

人間は、共同体に生かされ、共同体を生きている。

京都市は、短期的・個別的な利益追求が偏重される時勢においてなお、長期的な共栄を希求しながら、今^{こんにち}においては非合理・非効率と評され得るさまざまな人間的つながりを保全してきた。このまちには、地縁や職業のみならず、学事、祭事、稽古事、ひいては名も無きかわりてつながる彩り豊かな共同体が今も数多く息づいている。複雑で、繊細で、それゆえに愛おしくてたまらない生身の人間関係こそが、数多のつらなりとかさなりを宿すこのまちを織り成してきた。

わたしたち京都市民は、来^{きた}る四半世紀の間に、国内外の人口動態の変化、言語の壁の融解、さらには、これらに伴う経済構造や社会規範の変容の中で、地域社会のみならず国際社会の一員として、数多のつながりを紡いでいくこととなる。世界中の人々と生み出すこのまちの新たなひろがりにおいて、わたしたちの日常を包んできたあたたかな息遣いのもと、互いの歴史、文化、自然、そして人の在^あり方^{かた}をともに尊重していきながら、京都市と人類社会の双方の恒久の平和と共栄を実現していきたい。

第一章 京都基本構想策定の背景

第一節 世界文化自由都市宣言―世界史を担うまちを目指して

「都市は、理想を必要とする」。京都市の最上位の都市理念として 1978 年に策定された世界文化自由都市宣言は、都市の真髓を宿したこの一文に始まり、世界の現状の正しい認識、自己の伝統の深い省察、そして市民の努力によって都市が世界史において大きな役割を果たすと展望した上で、永久に新しい文化都市として平和のもとでの自由な世界文化交流の中心を担っていくという京都市の理想を示している。

世界文化自由都市宣言は、この理想の実現に向けた「われわれ市民」の決意を宣したものであり、約半世紀を経てなお、わたしたち京都市民に拠り所を与えてくれている。

第二節 京都市基本構想―21 世紀の到来を見据えて

世界文化自由都市宣言で掲げられた理念のもとで、1983 年に市政初となる京都市基本構想が策定された。その後、1999 年には市民の熟議を経て、新たな基本構想が策定される。

21 世紀最初の四半世紀を見据えた当該構想は、「わたしたち京都市民」を主語とし、京都市民の根底にある価値観を「めきき」「たくみ」「こころみ」「きわめ」「もてなし」「しまつ」という 6 つの得意技として再確認するとともに、信頼を基礎に市民社会の再構築をめざすというまちづくりの方針を示した。また、誇りと責任感に基づく市民ひとりひとりの市政への積極的な参加を呼びかけたことで、策定の過程での熟議とも相まって、新時代に即した市民主体のまちづくりの土壌となった。

第三節 京都基本構想の策定―「都市の理想」に立ち返って

今般、2011 年の地方自治法の改正によって基本構想の策定義務が廃止されたにもかかわらず、この後継に相当する本基本構想の策定に至った背景には、2025 年の現在においてこそ、世界文化自由都市宣言で述べられている「都市の理想」の重要性が一層増しているという時代認識と課題意識がある。

1999 年の京都市基本構想の策定から四半世紀の間、人類は、グローバル化の進展、インターネットや人工知能（AI）技術の普及、自然災害や感染症、戦争・紛争、さまざまな社会的分断の顕在化、そして、これらに連関する数多の変化を経験してきた。本基本構想は、時代の変化が複雑化・加速化の一途を辿る今日において、世界文化自由都市宣言という都市の理想にいま一度立ち返り、京都市とわたしたち京都市民の今後四半世紀の在り方を展望するものであるとともに、京都市基本構想の系譜を未来へと継承するものである。

第二章 京都のかたち

第一節 悠久の自然との共存の中で

このまちの歴史は 794 年の平安京の成立以前にまで遡るが、自治体としての京都市は 1889 年の市町村制度施行によって誕生した。以降、幾度も行政区の分合を重ねながら、2005 年に 1200 年前の平安京造営の木材供給も担った旧・京北町との合併を経て、現在の市域となった。

このまちを生きた先人たちは、悠久を体現する京都三山を望みながら、鴨川・桂川・琵琶湖疏水をはじめとする豊かな水の恵みのもと、人間と自然を不可分で一体的な存在と捉える自然観を思想的土壌として育んできた。食、建築、景観、服飾から藝道¹に至るまでのさまざまな生活様式や文化様式がこの自然観を宿しながら今日の京都市にまで根付いており、わたしたち京都市民と京都市にかかわる人々の生に彩りを与えてくれている。

過去数世紀の間、人類社会は、人間と自然を二元論的に切り分けて捉えた上で、自然を支配の対象としてきた。21 世紀初頭からは、この態度への反作用と反省もあって、「持続可能な開発」といったことが世界的に強調されるに至る。しかしながら、この地では、これらの言葉が社会的に流行する遙^{はる}か以前から、多くの先人たちが人間と自然の不可分性と一体性に基づく共存を志向し、これを体現してきた。この自然観は、改めて世界に提示していくに値するだろう。

第二節 歴史の重なり、文化の奥ゆき、ひとの連なり

このまちは日本史の主要な一角を担ってきたが、その軌跡は決して単一的・直線的なものではなかった。朝廷・幕府といった政治体制、神道・仏教・儒教をはじめとする宗教思想、これらと連関した経済活動などが複雑に絡み合う中で、戦乱等の危機を経てなお文化の力で再建を重ねながら、多層的かつ多元的に織り成されてきた長い歴史の現在地が、わたしたちの京都市である。

このような歴史の重なりの中で成立してきた藝道や武道、工藝といった文化の根底には、人間が到達し得る極致への志向を見出すことができる。身体と心、自己と他者、人間と自然を本来的に不可分と捉えるその精神性は、茶道や華道、能楽や武道、これらの道具や建築などを経由し、さまざまな生活様式においても体現されてきた。また、これらの文化は、今日まで名が伝わる名人や職人のみならず、名も無き担い手の創意や市井の人々の愛着と主体的な努力によって受け継がれてきたことを忘れてはならない。

こうして育まれてきた歴史と文化の重なりと奥ゆきは、長きにわたり新たな人間関係の端緒や基盤となり、そして、この人間関係こそが新たな歴史と文化を創発してきた。京都市の歴史と文化の重なりと奥ゆきは、今日においては軽視されつつある生身のひとの連なりを織り成すとともに、この連なりを過去や未来と不可分なものとして繋いでいる。現在を生きるわたしたち京都市民は、先人たちが紡いできたこのまちの歴史と文化の中を生きているのであり、また、これらを未来へと引き継いでいく責任の中を生きているのである。

第三節 節度と矜持に基づくひらかれたまち柄

このまちの歴史と文化は、それぞれの時代と分野とを生きる人々の節度と矜持によって支えられてきた。時流に翻弄されることなく生涯を捧げて伝統の真髓の保全と継承に尽力してきた先人たちの矜持は、その作品のみならず景観にまで刻まれ、このまちの空気をつくっている。また、この空気こそが、自分の領分を弁えながらも協働や響創²を可能とする節度を人々の内に育んできた。この両者に基づき時間をかけて培われる、身体的で、暗黙知³的で、それゆえに絶妙な間合いとあわい⁴は、表面的な言葉や短期的な経済合理性を超えた人間的信頼の基盤をこのまちに与えてくれている。

このまちは、伝統を保全するのみならず、先駆や進取の気性と創意工夫に満ちた遊び心によってさまざまな文化や産業を創出してきたまちでもある。数々の藝道や工藝、日本食や日本酒が育まれたのみならず、現代においても、数多くの大学や研究機関が集積する世界有

¹ 本基本構想では、「芸」（元々の意味は「草を刈り取る」）という漢字ではなく、「藝」（元々の意味は「木や草を植える」）という旧字体を使用した。

² 起草にあたっての有識者との議論に基づく造語で、一般的に用いられる「共創」を念頭に、各人の内面から空間ひいてはまち全体にまで自己と他者の相互作用が広がり、深まっていくさまを表現した。

³ 言葉で明確に表現または定義されていない、或いは、されることが困難であるために、知識として言葉を介して伝達・習得しにくいものを意味する。

⁴ 境界や間（ま、あいだ）を意味する言葉で、特に、流動性やゆらぎとこれに基づく境界そのものの不明瞭さや不確実さを含意する。

数の学術都市であり、また、精密機器や先端技術産業の国内主要拠点の一つでもある。これらの基盤を担っているのは、節度と矜持に基づくひらかれたまち柄にほかならない。時勢に安直に迎合することなく、それでいて分野や市域を超えて人々が交わりながら新たな創発を追求していく態度は、まさに守破離⁵の体現と言えよう。

わたしたち京都市民の日々のくらしもまた、このひらかれたまち柄の中で営まれている。商店街には個性豊かな専門店が立ち並び、横目に過ぎ去る、立ち止まって眺め入る、ひいては踏み入るといった自在な関わり方を見出せる。鴨川の河川敷では、銘々が、歩き、走り、座り、書を読み、水面を眺め、木々に触れるなど、人それぞれに時を過ごしている。こういった多彩な人々が互いに適度な距離を取りながら、微笑みを向け合い、ふとした拍子に言葉を交わし、果ては共通の友人を見つける。このような日常が織り成されるまちが、わたしたちの京都市なのである。

第四節 世界から敬愛される学^{がく}藝^{げい}の府

このまちは、心ある先人たちの尽力のもとで、世界中の人々から敬愛される学術機関や有形・無形の文化遺産を守り育んできた。11名のノーベル賞受賞者が市内の大学で研究に携わった経験を有し、15箇所¹⁵の寺社城がユネスコ世界文化遺産に登録されていることに象徴されるように、わたしたちの京都市は学術と文化・藝^{げい}術^{じゆつ}の双方において世界有数の都市、いわば学藝の府である。

しかしながら、このまちを学藝の府たらしめてきたのは、褒賞や登録の対象となった人々や寺社城のみではない。日夜の稽古に心血を注ぐ師弟、寸分の差に生涯を賭す職人、真髄を見定める市井の愛好家といった人々の日常の蓄積こそが、真理の探究や人間の極致の体現を志向するこのまちの学藝を深めてきたのである。学藝を取り巻くこれらの有名・無名の人々、いわば京都学藝衆もまた、わたしたちの京都市が世界に誇るべき人間的遺産にほかならない。

グローバル化とデジタル化の進展を受けて、このまちの学藝とこれを担う学藝衆とが世界とより密接に繋がり始めている。わたしたちの京都市は、悠久の自然、歴史の重なり、文化の奥ゆき、ひとの連なり、節度と矜持、そして、ひらかれたまち柄によって織り成される世界有数の学藝の府として、このまちが守り育んできた学藝と京都学藝衆とを、言語や文化的背景をも超えて、人類社会に広げていける大きな可能性を有している。

⁵ 日本の藝道や武道で広く用いられている、技芸の習得を三段階で説く概念。「守」は形（型）や師の教えを守ることによって基本を身体に染み込ませる段階、「破」はこれらの教えを批判的・懐疑的に破りながら意図的に逸脱する段階、「離」は「守」「破」のいずれの態度からも離れて独自性を獲得し、自在に振る舞えるようになった段階を指す。

第三章 世界・日本・京都市のいまと未来への課題

(1) 人口動態の変化とその影響

21 世紀最初の四半世紀の間、世界人口は増加の一途を辿ってきた。一方で、国内人口は 2008 年をピークに減少局面に入り、2024 年現在は約 1.2 億人、2050 年代には 1 億人を下回る見込みとなっており、すでに、内需の縮小、労働力の不足、社会保障費の増大などの影響が顕在化しつつある。

京都市の人口は長らく 147 万人前後で推移してきたが、2010 年代後半から減少局面に突入しており、特に就職や結婚・育児などのライフステージの変化に伴う若年層の流出が顕著となっている。この人口動態の変化は、市内各地域における人間関係を弱体化させているのみならず、このまちが長い歴史の中で育んできた住民自治の伝統や支え合いの精神と実践の双方を希薄化させており、孤立・孤独への対応をはじめとする福祉の維持・拡充と、各地域の歴史に根差した行事やこれらを彩る有形・無形の文化の保全が求められている。また、日本有数の大学街である京都市においては学生数減少の多大な影響も予見されるところ、まち全体としての在り方も大きな変容を迫られていくだろう。

(2) 日本経済の動向と京都市の産業

日本経済は、20 世紀末からの不況が尾を引く中でも 2010 年まで GDP 世界第 2 位を維持していたが、人口減少・少子高齢化や産業構造転換の遅滞などを受けて、2025 年現在においては GDP で世界第 4 位となった。この間、年功序列や終身雇用といった従来の雇用形態の変化、労働時間に関する規制の厳格化、転職や副業・兼業の一般化、女性の社会進出の進展などが見られた一方で、所得格差の拡大や労働力不足が深刻化を見ている。

京都市においても、製造業を中心とする大企業が世界市場で重要な位置を堅持する一方で、中小企業の労働者・後継者の不足が問題となっている。スタートアップ企業や新規事業の創出・拡大に向けた支援もさまざまに展開されているものの、大学等での最先端の研究成果の事業化や文化と市場の適切な接続を担う経営人材が著しく不足しており、グローバル化とデジタル化の流れの中で、地域の歴史と文化に根差した産業を維持発展させながら未来を担う人材を確保し育成していく必要性が年々増している。

京都市を訪れる観光客は過去四半世紀で 2 割以上増加し、2008 年には 5000 万人を突破、2020 年からの新型コロナウイルス感染症の流行によって一時的な減少を見たが、2023 年に同水準に戻り、現在も特に海外からの観光客を中心に大幅に増加を続けている。一方で、特定の観光地への訪問客の集中、市外からの新規参入の増加による地域に根差した事業者の衰退、公共交通機関の混雑、幹線道路の渋滞、マナーの差に由来するトラブルなど、市民の生活となりわいへの悪影響も生じている。京都市の歴史や文化が表面的に消費されていることへの強い懸念も見られるが、海外観光客は今後も増加が見込まれるとともに、世界各地の文化人等の来訪も増加しているところ、これらの深みや真髓を異なる文化圏の人々に伝えていく新たな工夫と努力が求められている。しかしながら、日本社会全体として、労働に関する考え方や規制は年々変化を続けており、徒弟制のもとで長年の修行を重ねた上で生涯を捧げることが期待されてきた伝統産業や^{げいのう}藝能における後継者不足への向かい風となってもいる。

(3) 環境問題・自然災害の深刻化と自然との関わりの希薄化

この四半世紀は、前四半世紀から国際問題として議論されていた環境問題が一層顕在化した時代でもあった。世界全体として都市化とこれに伴う人口集中が進み、気候変動と相まって、生物多様性が脅かされている。地球規模での対応に向けて国家の枠を超えた協力が志向されてきたが、政治・経済・宗教等の差異に由来する限界など、真の国際協調に向けた課題が顕在化してもいる。

日本においては、記録的な豪雨や猛暑日が増加しているとともに、地震や台風などの自然災害が幾度と発生してきた。南海トラフ地震の発生確率も年々高まっている中、高齢化・核家族化による地域社会の弱体化とも相まって、防災・減災対策の重要性が高まり続けている。

京都市においては、このまちの歴史・文化とともにあった自然、たとえば、祇園祭の厄除け^{ちまき}粽や京料理の敷き笹に使われるチマキザサ、葵祭の象徴たるフタバアオイ、各地の火祭りの松明に用いられるアカマツといった在来種が消失の危機に瀕しているなど、自然との

関わりの希薄化の影響が表出している。

(4) その他の国際的課題

2020 年からの新型コロナウイルス感染症の世界的な流行は、身体的・物理的な活動が不可欠な多くの文化を存続の危機に追いやるとともに、日本を含む世界各国に甚大な経済的損失を与え、多くの事業者が閉業に追いやられた。この間、国際機関や国際的枠組みの限界、国家間の経済力・技術力・行政対応能力の格差、ワクチン等の開発や分配にあたっての企業間の競争意識が随所で顕在化する結果となった。

また、21 世紀を迎えてもなお、戦争や紛争の悲惨は発生・持続しており、特に 2020 年代に入って国際社会の緊張感が一層増長している。日本、そして京都市は、直接的には戦禍を免れているものの、文化を介した相互理解の深化による世界平和への貢献余地が年々高まっているとも考えられる。

2010 年代からは、ESG（環境・社会・企業統治）を重視する投資、SDGs（持続可能な開発目標）、DEI（多様性・公正性・包括性）といった、世界全体での公益追求に向けた包括的な取組も進められてきた。2025 年現在においては自国第一主義への回帰など反動が見られつつもあるが、来る四半世紀においては、世界全体での人口動態の変化を見据えて、国際協調に向けた新たな気運醸成と体制構築が求められるだろう。

第四章 わたしたち京都市民がめざすまち

わたしたちの京都市は、家元や名工、研究者や技術者、在野の職人、そして市井の愛好家といった人々の夢中と献身が世界中の人々の敬意と愛着と交わり、人間関係を織り成しながら人類社会の新たな地平を拓いてきた、世界有数の学藝の府である。学問、藝術、そして必ずしもこれらに分類されないさまざまな人間的営為⁶において真理の探究や伝統の継承と創造に挑む人々の生き様は、その土壌となった豊かな自然と併せて、世界中の人々から敬愛されている。また、これらの人々も、市内の各地域においては立場や肩書きを超えて、子どもたちの登下校を見守り、神輿を担ぎ山鉦を曳き、喫茶店や居酒屋で談笑し、ときには地域猫を愛でながら、ともに京都市の日常をつくっている。

わたしたち京都市民は、このまちのいたるところに根差す学藝のもとで市域ひいては時代をも超えてつながるこれらの人々、すなわち京都学藝衆とともに、世界文化自由都市という理想の体現を通して、人類社会の未来に貢献していく。この際、近代以降の合理主義の加速化が自然を支配の対象と捉え、環境を破壊し、人間性を収奪し、さまざまな社会的分断を生み出してきたことをともに省み、歴史と文化を介して人間性を回復⁷できるまち、自然への畏敬と感謝の念を抱けるまち、自他の生とともに肯定し尊重し合えるまちを、世界へと提示していく。

第一節 歴史と文化を介して人間性を回復できるまち

(1) 本物（ほんまもん）を追究・創造し続ける

わたしたち京都市民は、先人たちから受け継いできた先義後利⁸・不易流行⁹・利他の心¹⁰といった思想のもと、短期的な利益にのみ囚われることなく、年月を賭して自らの技量を熟達させながら、市外の人々とも積極的に連携・協働し、また、最先端技術を活用していくことで、世界に類を見ない独自の価値を新たに創造し続けていく。この際、このまちが醸成してきた節度と矜持のもと、時勢に翻弄されることなく本物（ほんまもん）を見極める感性を研ぎ澄まし続け、これを後世と世界とに伝え遺していく。また、生身の人間同士の信頼関係のもとで切磋琢磨^{せつさたくま}し合うとともに、近隣都市とも協働しながら、本物（ほんまもん）のさまざまなかたちを学び、受け容れ、創り出し、経済ひいてはまち全体の活力の源泉としていく。加えて、このまちの学藝をさまざまに担う京都学藝衆と学域・地域のつながりを深めることで、この本物（ほんまもん）とこれを見極める感性の次世代への継承・教育の機会を創出するとともに、このつながりを市外ひいては国外に住む人々とも結い合わせながら、学域・地域を持続させていくための土壌としていく。

(2) 世界の文化と交流し、新たな文化を創造し続ける

わたしたち京都市民は、ひらかれたまち柄のもとで世界と文化交流を重ねながら、国際社会ひいては人類史をも豊かにする新たな文化を創造し続けていく。グローバル化とデジタル化が進展していくこれからの時代においてこそ、今日の本物（ほんまもん）もまた進取の気性と創意工夫に満ちた遊び心によって発祥を見たこと、加えて、このまちの歴史と文化が当初は異端や辺境とされていたものの受容や外部との交流によって織り成されてきたことを忘れることなく、市内の人材がその進取性と遊び心とを最大限に発揮できるように、また、世界中の国や地域から突き抜けた人材を集めるために、工夫と努力を重ねていく。これらの人材をはじめとする多様で多彩な人々がこのまちと交ざり合う中で生まれる新たな文化を積極的に受容しながら、京都市の多様性と包摂性をさらに高めていき、日本中・世界中の人々から活動の拠点として選ばれるまちにしていく。

⁶ 「営み」を指す言葉で、「為」を加えることでより主体的な意味合いを有する。
⁷ 概念的で全人格的（総合的）な次元において元の状態に戻ることに用いられる言葉。なお、「回復」や「快復」は、一般に、健康状態や個別の機能に対して用いられる。
⁸ まずは「義」（人としての義理や道理）を実践していれば、「利」（企業としての利益）は後からついてくるという考え方。渋沢栄一が儒教の教えに基づき企業倫理の標語として掲げたとされる。
⁹ 「不易」（永遠に変わらぬ物事の本質）と「流行」（時代に応じて移りゆく表現）の両者の根本は一つであり、したがって両者の統合が重要であるという考え方。松尾芭蕉が俳諧論において示したとされる。
¹⁰ 自己の「利」（利益、快楽、幸福）ではなく他者の「利」を優先する心。元々は仏教の教え。

(3) 「夢中」と「感動」に溢れ、学び続けられる

わたしたち京都市民は、日々の生活の中に歴史と文化が息づき、多様な個性が受容されてきたこのまちで、自身の生涯を通じて学びたいこと、体得したいこと、夢中になれることを見定めていく。また、人生とまちに対するこのような姿勢を互いに尊重し合い、これをまちの空気としていくことで、市外ひいては国外からも人が集い、夢中が溢れるまちをつくっていく。特に、わたしたちの京都市の未来を担う子どもたちや若者が、このまちの自然や歴史と文化に触れながら豊かで鋭敏な感性を育み、学問から藝術、武道、技芸、さらにはスポーツに至るまでのさまざまな物事を個性に応じて追求できるまちであり続ける。加えて、大学や博物館、名勝や史跡、伝統産業から先端産業までもが広く集積することを活かして、まち全体をキャンパスと捉えてこれらを有機的につなぎ合わせながら、年齢、性別、国籍、文化圏などを超えてともに学び合える、夢中と感動に溢れた人生とまちを織り成していく。

(4) 平穏と静寂のもとで自己と世界と深く向き合える

わたしたち京都市民は、このまちの自然と歴史と文化が醸成してきた平穏と静寂のもと、日々、^{ひたむ}直向きに自己の在り方を省み続けるとともに、他者、地域、ひいては国際社会との関わり方を真摯に考え続けていく。このまちの深い^{せいひつ}静謐¹¹を後世の京都市民に遺していくのみならず、戦争や紛争の発生や持続、生身の人間関係の弱体化、自然との関わりの希薄化、社会的分断の深刻化といった時勢が世界的に強まり続けていく中で、各国・各地域の人々にとっても、自己と世界とに少しずつ深く向き合えるまちであり続ける。文化を介して人間の人間たる^{ゆえん}所以¹²をともに問い、人間の^{はかな}儚^{もろ}さと脆さ、そして尊さをともに抱擁し、わたしたち人類が国境や文化的背景を超えて互いに尊重し合えることを再確認できるまちであり続けることで、京都市と人類社会の双方の恒久の平和と共栄に貢献していく。

第二節 自然への畏敬と感謝の念を抱けるまち

(1) 謙虚に自然と関わり続ける

わたしたち京都市民は、豊かな自然の恵みこそが、このまちの歴史と文化の根底を形成してきたことを忘れることなく、自然との共存を志向していく。食材はもちろん、建築から服飾に至るまでのこのまちの生活の基盤に自然があったこと、ひいては、自然こそがわたしたちの生の源泉であることを改めて認識し、自然の中で生かされている命のひとつであるという謙虚さのもと、生活そして生業を営んでいく。

また、このような自然観が年々希薄になっていく時流においては、自然との不可分性・一体性を改めて体感し体得できる機会を意識的に創出していきながら、京都市民のみならず人類社会に対しても、この自然観を伝え遺していく。

(2) 災害や感染症などの危機からしなやかに立ち直る

わたしたち京都市民は、このまちが千年以上の歴史の中で培ってきたしなやかさを保持しながら、さまざまな危機に先んじて備え、対応し、立ち直ることができるまちをつくっていく。

このまちは、幾度もの戦乱を経験し、そしてその都度、復興を遂げてきた。このまちが千年以上にわたり都市機能を遮断することなく存続し続けてこられたのは、先人たちの不屈の精神と知恵や工夫、そして、これらを体現し支えてきた文化の力に^よ依る。過去四半世紀の間、わたしたち京都市民もまた、自然災害や感染症の脅威を経験し、立ち直ってきたが、その土台にはこのまちが歴史の中で育んできた重層的なひとのつながりがある。地域住民、地域団体、市民団体といったさまざまな主体が、それぞれに備え、また、連携・協働し、防災・減災・復興に取り組んでいくとともに、このまちへの愛着と敬意とを、わたしたち京都市民はもとより国内外の人々までもが抱き続けられるよう、自然、歴史と文化、ひとの連なりを守り続けていく。

¹¹ 静かで落ち着いているさまを指す。

¹² 理由や根拠を指す。

第三節 自他の生とともに肯定し尊重し合えるまち

(1) 多層的でゆるやかなつながりが続く

わたしたち京都市民は、番組小学校や町内会といった形で先人によって培われてきた住民自治の伝統を継承しつつ、京都市にかかわるあらゆる人々と、趣味、習い事、商い、祭事などを介して、ゆるやかでひらかれたつながりを紡ぎ続けていく。また、互いの肩書きや立場を超えて人間同士として笑みを向け合い、言葉を重ね、酒を酌み交わせる、そういったこのまちの人々の^{すい}粋な在り方を、後世にも伝え遺していく。加えて、市外から通勤・通学する人々から観光客に至るまで、京都市とさまざまな関わり方をしている人たちもまた、わたしたちの京都市の現在を担ってくれていることに感謝と敬意を抱きながら、多彩なつながりを多層的に織り成していき、誰もが安心と愛着とを抱ける心地よいまちをつくっていく。

(2) 支え合いの中で日々の生活を営める

わたしたち京都市民は、支え合いの福祉を守り、これを広げていくことで、誰ひとり社会から取り残されることなく、安心と安全のもとで健康で文化的な生活を営み続けられるまちであり続ける。

このまちは、普段から支援を担う人たちと普段から支援を受ける人たちとが場面や事情に応じて役割を循環させながら、互いに支え合って歴史と文化を紡いできた。さまざまな形でこのまちに携わることで笑顔や感謝に包まれるのみならず、自分自身もさまざまな形でこのまちに支えられる。地域の人々がともに子どもたちの登下校を見守り、子どもたちの声と笑顔が地域に活力を与える。こうした相互関係の中で、笑顔や感謝がまち全体にまで広がっていき、このまちが育まれてきたのである。わたしたち京都市民は、このような社会とのつながりと役割をそれぞれに担いながら、多層的な支え合いの中で、ともに自分らしくあり続けられるまちをつくっていく。

(3) ひとりひとりの個性や価値観を尊重し合える

わたしたち京都市民は、出自や生い立ち、年齢、性別、国籍、性自認や性的指向、宗教や信条、身体的・精神的特徴の有無や程度、その他の差異にかかわらず、すべてのひとが個性を発揮でき、互いを認め合いながら、自分の「居場所」と「出番」を見つけて日々を享受できるまちをつくっていく。この際、国内最初の人権宣言を採択した全国水平社の設立や、福祉事業の全国的な先駆けとなった京都ライトハウス創設をはじめ、京都市の先人たちが実践してきた人権尊重の精神性と先進的な取組とを継承していく。あらゆる個性を互いに受容し、互いを思いやり理解しようとする心を育み、安心・安全のもとで住みたい場所に住むことができる、また、だれもが等しく就労や社会参加の機会を得られ、それぞれが望む生き方や暮らし方を実現できるまちにしていく。

第五章 わたしたち京都市民のこれから

わたしたち京都市民がめざすまちのすがたは、市民、行政、市会がそれぞれの役割を果たしながら、ともに真摯に議論と対話を重ね、これを日々の活動に反映し、そしてまた活動の経過や帰結を新たな議論と対話に反映していくという、不断の循環の中で実現されていくものである。

市政の主体は、市長や市会議員を選出する、市内に居住する市民が担ってきた。

市長は、市民の思いをもとに市政の方針を示し、行政がこれを実行してきた。

市会は、市民の代表として、市民の声や活動を行政に伝えていくとともに、市長とともに市政の両輪の一つとしての役割を果たしてきた。

他方で、京都市は、市内に居住する京都市民によってのみつくられてきたわけではない。わたしたちの京都市においては、働き、学び、憩うために市外から日々足を運ぶ人々、進学・就職・育児等による転居後も京都市に深い愛着を抱いている人々、かつて観光で訪れた経験のある人々、訪れたことはなくとも京都市に対して憧憬や敬意を抱いてくれている人々など、京都市とのさまざまな関わり方を見出すことができる。わたしたち京都市民は、京都市がこれらの人々の思いや献身のもとで存立していることを、忘れてはならない。

わたしたち京都市民がめざすまちのすがたを実現していくためには、従来の市民の枠組みに囚われることなく、人生や日常のほんの僅かな一部であっても京都市の現在と未来をともにつくっていくこれらの人々、いわば広い意味での京都市民と、積極的に協働していくこと、言い換えれば、多義的¹³な市民性を促進していくことが不可欠である。また、この際、これらの人々が銘々において自在に京都市にかかわることができる設計や、多層的で多彩な帰属意識の醸成と可視化を可能とする取組が求められる。わたしたちの京都市と何らかのかかわりを持った人々が物理的・時間的な隔たりを超えて京都市と関わり続けていける仕組みをデジタル技術も活用しながら構築していくとともに、これらの人々とわたしたち京都市民の議論と対話を新たに織り成し、深めていく必要がある。

日本全体で人口減少と少子高齢化が続いていく見込みの中、今後の京都市においても、行政職員数や予算の制約、地縁の希薄化、家族・親族間の扶助の縮小など、公・共・私のそれぞれにおいてまちを支える機能が低下していくことが予見される。一方で、これまでの京都市においては、公・共・私のあわいを主体的かつ献身的に支える町内会、市政協力委員、市民団体や有志団体、個別の名称を有さない集いやつながり、そして、これらの団体・活動間の連携や協働こそが、重層的にまちを支えてきた。人的資源や行政機能が徐々に縮小していく未来においては、新たな団体や活動の組成を積極的に促すことはもちろん、これらと既存の取組を有機的に接続していくことが必要となる。

このような姿勢は、節度と矜持のもとで世代や公私の別をゆるやかに超えてきた京都市のまち柄と通底するものにほかならない。行政は、公務への責任感と誇りを強く保持しつつ、公・共・私の垣根を可能な限り低くすることに加えて、このまちで日々の生活を営む居住者たる京都市民と、それぞれの関わり方の濃淡を有する広い意味での京都市民とをつなげ、ともに京都市のまちづくりを担っていけるような設計に尽力していく。また、この過程において、あらゆる主体が「居場所」と「出番」を見出し、ひいては、これらを新たに作り出していけるよう協働していくことで、京都市の次の千年の歴史の基盤を構築していく。

未来への問いかけ

世界文化自由都市宣言にもあるように、理想の宣言はやさしく、その実行はむずかしい。しかしながら、このまちは、数多の困難や苦難を乗り越えながら、千年以上にわたる時を重ねて、今日のわたしたちの京都市にまでこのまちの自然・歴史・文化・まち柄を継承してきた。

わたしたち京都市民もまた、現在そして未来において、数多の課題と向き合っていくこととなる。利便性や快適性を追求する技術革新が人間同士の生身のつながりを収奪あるいは再定義していく中で、両者の均衡をどう見定め、どう実現していくのか。京都市を訪れる観光客が増加を続けていく中で、日々の生活と生業を営む市民への影響にどのように対応していくのか。少子高齢化をはじめとする社会的要因で支援・ケアを必要とする人が増え続けていくにもかかわらず支援・ケアを担う人材が減少していく中で、誰ひとり取り残さないま

¹³ さまざまな意味を持つ、という意。

ちをどう築いていくのか。わたしたち京都市民の日々の営みは、このまちの歴史と文化を体現し継承していくという責任を果たしているか。政策や市民活動が、直近の時勢や眼前の課題にのみ囚われたものでなく、このまちが守り育んできた価値観に立脚できているか。わたしたちの京都市が、このまちの千年の歴史に対して、ひいては、これから千年先の未来においても、胸を張れるものであるか。

この京都基本構想は、このまちが千年以上もの歴史の中で醸成してきた価値観を確認した上で、世界と日本、そして京都市の現状を踏まえて、これからのまちづくりの在り方を展望したものである。しかしながら、本基本構想は、あくまで、京都市そして京都市民の在り方を考えるにあたっての拠り所にすぎず、今後四半世紀の京都市の未来はわたしたち京都市民がこれからつくっていくものにほかならない。本基本構想を土台として、わたしたち京都市民ひとりひとりが、上記した問いはもちろん、時代に即した新たな問いをも自ら見出し、それぞれの暮らしの中で考え続け、議論と対話を不断に重ねながら、複雑で繊細な現実の中でなお直向きに具体化していく必要がある。そして、この過程においてこそ、京都市が日本中ひいては世界中の人々に敬愛され、人類社会の未来の一端をも担っていく、すなわち、世界文化自由都市として世界史において大きな役割を果たすという都市の理想が実現されていくはずである。

わたしたち京都市民は、このまちが長きにわたり醸成し保全してきた人間的遺産の享受者であり、継承者でもある。この意義と幸福を噛み締めながら、世界文化自由都市という都市の理想の実現を希求し、京都市そして京都市民の在り方を世界とともに不断に問い続けていくことをここに改めて静かに決意して、この京都基本構想を結ぶ。